

「多様性への対応に関する 調査研究事業」最終報告書

岡山県美作高等学校

目次

1. はじめに 調査研究の目的、内容について

2. 実践内容

- (1) ひきこもり、無職・無就学生徒の解消に向けた教育の実践
- (2) 高卒資格を持つ人への再教育の場
- (3) 閉校した学校の活用
- (4) ICT を活用した教員不足解消の自学自習スタイル
- (5) 地域人材の活用

3. 成果と課題

1. はじめに

調査研究課題名

過疎地と共生する通信制生徒の学習支援事業

～人口減少が続く地域における地域が学校、地域人が先生

そして産・官・学協定事業で地域のこどもを地域が育てる～

調査研究のねらい

過疎化・人口流出が続く地域において、人口比率とは関係なく、依然として高い推移で不登校をはじめとする特別な支援を必要とする生徒が出現している実情がある。地域で育ち、地域で暮らすこのような生徒達こそ、将来、本当の意味で地域を支える人材になりうると考え、そういった生徒について地域と連携した教育を調査研究する。

本校は通信制を開校して20年になる。地域の強い要望から生まれた本校通信制は、狭域制であり、主に岡山県北の不登校や全日制高等学校を中退した生徒を、これまで750名以上社会に送り出してきた。設立当初は、「地域の全ての子供達に高校卒業資格を」という地域の願いを叶えるための教育活動であったが、多くの広域制通信制高校ができあがってきたことから、高校卒業資格取得のみが目的ではなく、通信制と言えどもコミュニケーション能力を身につけた生徒の育成をめざし差別化を図っている。

そのため、教科書からだけの知識を身につけるのみならず、人とのふれあいから学ぶ知識の両方を身につけた生徒の育成を目指す。「地域が学校、地域人が先生」という本校の理念から、今まで日本社会を支えてきた地元の高齢者を指導者に加えた教育活動を実践していき、そして継続的な調査研究が行えるよう、大学教授や行政関係者と連携した活動とする。

今回、昨年までの「次世代の学習ニーズに関する研究」を発展させ、「多様性への対応に関する調査研究」を踏まえ「特別な支援を必要とする生徒」を不登校やひきこもり、発達障害など特別支援教育に該当する生徒と位置づけ調査研究を進めていく。

調査研究の概要（当初目標）

まず最初に、調査研究の概要については、年度当初にコロナ感染拡大を想定せずに計画した当初目標であることを申し添えておきます。結果的に人を集める行事や高齢者と交流する行事などは中止を強いられました。そこで、テーマにできるだけ近い内容で、コロナ禍でできることはないかを考えながら取り組みました。したがって、後述の実践内容が概要とかけ離れている場合もありますので、ご了承下さい。

ただ、コロナ禍でできることを考えることは、もうしばらくは続くであろう、私たちが経験したことのない教育環境下における対応策として、意識的に持ち続けなければならない考え方であると認識できたことは収穫かもしれません。

(1) ひきこもり、無職・無就学生徒の解消に向けた教育の実践

定員 10 名とした、ひきこもりや無職・無就学生徒のための学習教室（名称 ネット）を開校し、学習及び社会支援活動を行う。その際、地域人材を活用し、地域人が教師役となり、学習支援や庭木の剪定作業、郷土料理の調理などを教授する。

(2) 高卒資格を持つ人への再教育の場

概ね 30 歳までの若者に対する再教育を実践する。自己肯定感の回復、再度学びに向かう意欲の醸成を目指す活動となる。学習内容は、国語、社会などの 5 教科の学び直し事業だけでなく、就労活動支援としてハローワーク等との連携を行い、就労活動や経営者による講話などを取り入れる。また、新聞記者による N I E 活動、(1) と同様に、地域人による講義などを実施する。

(3) 閉校した学校の活用

鏡野町旧奥津中学校の校舎を借り受け、奥津キャンパスと称し、通信制として特別講座などを行っている。その旧校舎は農産加工会社と共有しており、敷地内にある企業の協力を得て就業体験ができることを最大限のメリットと考え、就業体験（インターンシップ）を実施する。

(4) ICT を活用した教員不足解消の自学自習スタイル

遠隔教室に教科担当教師がいない場面でも、学習することができる活動を実践する。生徒は、タブレットを用いて、オンライン講義やNHK高校講座の視聴を行う。その際、質問などはメールや LINE を用いる。教師は、学校にいながら生徒への対応が可能となる。

(5) 地域人材の活用

鏡野町シニアスクールと連携し、地域人材に郷土料理や伝統文化・行事などを学ぶ機会

を提供するとともに、生徒達はシニアに対して、スマートフォンやタブレットの使い方を教えるなど、双方向学習を取り入れることで、コミュニケーション能力を醸成する。

調査研究メンバー

担当者氏名	所属研究機関 部局・職名	具体的な役割分担
前 克浩	通信制課程 教頭	責任者
村山 直人	教諭	ICT 教育担当
小林 泉	教諭	教員不足の解消担当
太田 知里	教諭	学習教室（ネスト）担当
岡野 楓基	講師	再教育の場担当
廣川 美月	講師	閉校した学校の活用
木村 みどり	非常勤講師	再教育の場担当
竹内 正人	事務室長	事務責任者 経理担当
山下 武宏	福祉コース長	前 通信制教頭
川崎 雅史	地域相談員	再教育の場担当

2. 実践内容

1. 本校 多様性への対応に関する調査研究事業

(1) ひきこもり、無職・無就学生徒の解消に向けた教育の実践

ひきこもりや無職・無就学生徒のための学習教室（名称 ネスト）を開校し、募集を開始した。しかし、全国一斉休校や再開後も通級してのコロナ感染の不安感から、校外からの参加者を得ることはできなかった。

ところが、コロナの影響は通信制に在籍する生徒にも現れ、日曜スクーリングの集団に入れない生徒が出てきた。ネストはもともと、学校敷地外の旧女子寮の一室を利用することにしていたため、ネストの代わりに、そちらに通信制生徒のための平日スクーリングを開校することとした。これにより、コロナでひきこもりかけていた生徒について、少人数の環境を提供し単位認定まですすめることができた。これらの実践は、アフターコロナでのネスト開設に大きなヒントとなった。

さらに、日曜スクーリングの代替としての平日スクーリング以外にもその一室を使い、一人でレポート作成ができない生徒に声かけを行い、教師のいる環境でレポート作成のサポートを行う平日サポート補習が実施できた。これらの生徒の多くは、アルバイトをするでもなく、平日に自宅にこもっているケースが多い。これらの生徒が、外の空気を吸い、社会活動への助走を行うためにネストは役立つと考えられる。



本校通信制教育活動の平日利用の新しい取り組みとして今後のサンプルとなった。（写真：R2 年度平日スクーリングの様子）

(2) 高卒資格を持つ人への再教育の場

地域の高齢者との交流活動がコロナの影響で実施できなかった。そのため、高齢者に対する学び直し事業は出鼻をくじかれた形となった。

しかしながら、通信制生徒の中には、60代女性、30代男性が在籍しており、彼らの存在が若年層生徒達の学習意欲に少なからず寄与している。

60代女性は、中学生当時、家庭の事情から高校進学をせず、就職進学として働きながら通信制美容専門学校に入学し、美容師の資格を取得した。仕事を続け、家庭を持ち、子供達の手が離れたことを機会に、通信制高校へ入学し高校卒業資格を得ることを目標に3年目となる。

30代男性は、高校に入学したが、その後中退。各種職業に就きながら生活していた。

結婚をし、自営業を始めたとき、取引相手から、ただ単に高卒資格がないことだけで理不尽な態度を受ける。そこで、一念発起し、働きながら高校卒業資格を得るために通信制の門をくぐり、3年目になった。

別の30代男性は、高校を中退したが、実直な性格であり、就職先から信頼を受ける働きぶりであった。ある日、上司から昇級を目指してある資格を取得しないかとのアドバイスを受けたが、その資格が高卒者でなければ受験できないことがわかり、改めて高校卒業資格の重要性を知った。そのため、自らの今後の人生のために高校卒業資格を目指し、通信制へ入学し2年目を迎えている。

これらの方々は平日の仕事と、日曜日のスクーリングを両立されている。その学習態度は、在籍している他の生徒には大きな刺激となっている。また、年齢の異なる生徒達はあるときは敬語で、あるときは友達として話しており、異年齢との交流にもなっている。今後高卒資格を持つ人への再教育を提供する際には、通信制生徒との交流を模索すると効果的な教育内容となると感じる。

(3) 閉校した学校の活用

鏡野町奥津中学校の廃校の際、本校および農産加工会社が校舎を分割する形で鏡野町から借り受けた。本校では、奥津キャンパスと称し、部活動の合宿、勉強合宿、特別講座などに利用している。通信制は一昨年度より平日スクーリングの一環として、本校と車で約40分の位置にある奥津キャンパスに行き講座を行っている。平素とは異なる、自然豊かな静かな学習環境であり、毎週火曜日を奥津スクーリングの日と決め、今年度は本校からスクールバスで生徒達を引率した。

昨年度は年間21回、今年度は年間12回のスクーリングを行った。当初、奥津キャンパスに同居している農産加工会社へのインターンシップを予定していたが、コロナの影響で定期的にスクーリングを行うことができなかった。

(右写真：昨年度の奥津スクーリング)



そのため、今年度は、「コミュニケーション能力向上」をテーマとし、各教員が教科にとらわれず生徒の興味を引きながら、自然とコミュニケーションを行うような特別授業を実施した。ある教員は、カードゲームを使ったレクリエーションを、ある教員はUVレジンを使ったキーホルダー作りを、ある教員は奥津の自然や町並み・住民などの写真撮影テクニック講座を行った。

参加した生徒達は、毎週の講座を楽しみにしており、通常の授業とは違った、笑顔あふれるスクーリングとなった。本来ならば、農業体験や、お年寄りによる講座などが企

画させていただきに、非常に残念であったが、通信制生徒をひきこもらせず、変化のある環境に連れて行くことには成功した。

(4) ICT を活用した教員不足解消の自学自習スタイル

昨年度、奥津キャンパスと本校をライブ映像でつなぎ、現地にいない教員の授業を配信する事を想定し、実験を行っていた。この経験がコロナによる全国一斉休校で役立つ事になった。

まず、年度当初、生徒達との連絡手段として、LINE 公式アカウントを取得し生徒全員に登録をさせた。LINE 公式アカウントは、通常のチャットもできるが、一番のメリットは一斉送信ができる場所であった。今思い返せば、この LINE 公式アカウントの導入が、後々のオンライン授業に大きく役立つことになる。

全国一斉休校が発表され、本校通信制も日曜スクーリングを休校せざるを得なかった。しかし、遠隔地ライブ授業のノウハウを活かし、4月末よりいち早くオンライン授業に取り組むことができた。生徒は家庭に滞在し、日曜スクーリングの同じ時間帯に、予定されていた時間割通りに、教員が学校から Zoom を利用し授業を配信した。Zoom のミーティングルーム URL の伝達に LINE が役だったことになる。

物珍しさもあってか、生徒達の参加率は高く、出席率は全講座平均 90%を超えていた。この授業は録画しておき、都合で受けられなかった生徒のために Youtube にアップロードした。授業に参加したかどうかの確認には、キーワードシートを配布し、授業の途中で教員が示す「キーワード」をシートに書き込み、レポートと一緒に提出する形で講座受講とみなした。また、これまで利用していなかったのだが、NHK 高校講座についても、「視聴カード」を提出することで、必要講座数の一部に充てられるように配慮した。

これらは、授業再開後にも応用的に使われ、平日のオンライン面談やオンライン質問コーナーなどが継続的に行われたことは ICT 活用の側面から有意義であった。

(5) 地域人材の活用

昨年度は、「郷土料理講習会」など、シニアスクールに協力をあおぎ、巻き寿司作りと吸い物、そして串揚げといった料理を作ったが、今年度はコロナの影響で、シニアスクールとの連携は実現しなかった。

(右写真：昨年度の郷土料理講習会)



代案として、「匠に聴く」という講演会を開催した。通信制生徒の自立を促し、仕事として組織に所属することが苦手な生徒に、個人事業主の起業体験を伺い、機会があれば、

その事業主のところでインターンシップまたはアルバイトをさせていただくことが目的であった。

手始めに、学校の近所にあるパン屋の店主を招き、高校時代の学校生活、当時の進路目標、それがどう変化しパン屋へ変わったか、起業資金はどう調達したかなど、本校教員とのディスカッション形式で講演会を行った。



特筆すべきは、この講演を聞いた生徒が、質問コーナーで挙手し、

(写真：R2 講演会「匠に聴く」)

「アルバイトは募集していませんか？」と問い合わせたことである。そして、実際にアルバイトをし始めたこと。後日談になるが、結果的に正式採用され、将来は自らのパン屋を出店したいという目標ができたことである。この生徒はこれまでアルバイトが長続きせず、組織に属することが苦手な生徒であった。彼の輝かしい未来を祈念する。

成果と課題

今年度の成果については、当初計画された事業の多くは取り組めなかったため、代案を立て、その代案が副産物的に成果をあげた側面がある。

まず、年度当初に急遽実施された全国一斉休校であったが、昨年までの調査研究が土台となり、オンライン授業が実施できたことであろう。元来、奥津キャンパスと学校とを結び、遠隔授業を行うものであった。このノウハウが、急遽全生徒に対するオンライン授業の実施に対しても抵抗感なく教員へ導入された効果は非常に大きい。また、その一連の計画の中でLINEを使うことを想定し、4月当初に全生徒に対してアカウント登録させていたことも、スムーズなオンライン授業開始に役だったと思われる。ただし、今後についてはオンライン授業の利点と難点をしっかりと検証すべきであり、それぞれのメリットを活かした併用が望ましいと感じる。例えば、週1回しか登校しない通信制生徒だからこそ、オンラインで面接指導を行ったり、時間のない保護者とオンラインで三者懇談を行ったりする。しかし、授業自体はやはり対面が望ましい。さらには、コミュニケーション能力を醸成するためには多くの人と接する機会を作るのが望ましいので、オンラインでは無理である。

また、居場所作りのためのネストであるが、少なくとも通信制生徒のひきこもりを防ぐことには役立ち、通信制の平日スクーリングのヒントにも役だった。また、このことは、通信

制生徒のみならず、本校全日制の不登校生徒への対応にも参考となる活動であったと考える。例えば、本校全日制生徒に対して、全日制に在籍している間、ネストを利用して通級に慣れさせ、最終的に通信制への進路変更に至るか、全日制への復帰を考えるかどうかを見守ることに役立ちそうである。

さらに地域人材の活用は、通信制生徒にとって大きな教育的効果が見られることも、改めて成果として上げたい。往々にして他人とふれあう機会の少ない通信制生徒には、交流ができなくても、一方的な講話であったとしても、コロナ禍であったとしても、来年度以降も継続的に計画していき、方法を模索しながら、そのような機会を増やしていきたい。

さて、昨年の報告書である生徒の様子を成果として紹介した。その生徒が卒業にあたり作文を書いてくれている。1年後の彼の心境を見ていただきたい。

「自分自身と向き合えた四年間」

入学当初15歳だった自分は、19歳となり、大学生活という新しい世界へ足を踏み入れようとしている。思い返すこと4年前、あの頃の自分は、通信制での高校生活に不安を感じていた。「通信制に入学して、自分は一体どうやって卒業まで過ごすんだ。卒業の時に通信制でよかったと思えるのだろうか。」そんな気持ちを抱えたまま、入学式の日を迎えた。入学式が終わり、その次のスクーリングから、本格的に通信制での高校生活が始まった。通信制では週1回、日曜日に学校に登校するスクーリング、月に2回のペースで郵送するレポート課題、前期、後期ごとに一度行われる単位認定試験、主にこれら3つを乗り越えて、晴れて単位が取得でき、卒業へ近づく。自分は、この4年間の中で、よく提出期限ギリギリにレポートを出していないことに気づき焦ったことがあったが、なんとか無事に乗り越えることができた。通信制に入ってから1、2年は、レポートなどを頑張りながら、コンピューター関係の勉強をして過ごしていた。なぜなら、当時の自分の中には、将来コンピューター関係の仕事をフリーでやっていきたいという思いが強かったからだ。また、勉強をしていく中で数学を扱う必要があったので、数学の勉強も多くしていた。数学は、中学2年生の頃から好きだった。高校3年生の4月に「実用数学検定準一級」を受験し、合格した。試験中、問題を解いていて、とても楽しかったあの日の記憶は今でも鮮明に覚えている。その楽しさという感覚から、自分の中で「もっともっと数学をしたい」という気持ちが芽生えた。3年生では、当時教頭だった山下先生の勧めもあり、奥津キャンパスで一つ下の学年の子に数学を教えたり、津山市教育委員会が主催する「学びカフェ」というプロジェクトで数学講師としてボランティアに参加させていただいた。学びカフェでは、70歳の男性に高校から大学程度の数学を教えた。毎回、毎回受けるかなり鋭い質問に返せるように万全の状態に挑めるように授業準備をしたのが、とても楽しかった。4年生になった今年度は、受験生

として勉強に努めている。その中でも大きな経験となったのが、「京都大学理学部特色入試」だ。9月末から全日制の坂田先生にアドバイスをいただき、書類審査を通過し、11月に二次試験を受けに京都へ向かった。内容は数学の超難問4題を4時間で解答するというものだ。残念ながら二次試験で不合格になってしまったが、この経験を通して、「将来数学を専攻していきたい」という思いが強くなった。

思い返せば、4年間本当に色々なことがあった。それは、タイトルのように「自分を見つめ直した4年間」だった。これからの人生において色々なことに直面すると思うが、この4年間の思い出は心の中で大切な1ピースであることには違いないはずだ。

「通信制を選んで本当に良かった。」と今なら思う。

この生徒は、まさに「次世代学習ニーズに関する研究」および「多様性への対応に関する調査研究」の期間に在籍していた生徒である。彼は奥津スクーリングへの参加、地域人材との交流など、今回の事業の多くに参加してくれており、その事業の過程で自らの進路目標を見つけ、さらにそれを実現してくれた。彼の自己肯定感の変化、不安が安心に変わっていく様子、人とのふれあいによる成長、目標設定とその実現などが読み取れる。今回の調査研究による経年の成果として紹介する。

さて、おそらく本校だけではないと思われるが、昨年度のコロナ感染拡大以降、不登校傾向の生徒を増加させているように感じる。抜本的なコロナ撲滅にはまだまだ時間がかかりそうなので、コロナ禍における不登校対策が新しい課題となりそうである。

オンライン授業はコロナ対策として教育に多く取り入れられてきている。また、広域制通信制には、そもそもオンライン授業が主たる学校もある。今回、コロナ対応として本校でもオンライン授業を取り入れたが、対面授業とオンラインの効果的な使い分けでひきこもりの解消に効果があるように感じる。

また、コロナ禍でできなかった高齢者との交流を、定期的なオンライン通話などに活用する方法があるかもしれない。個対個の交流となる可能性はあるが、逆に安否確認などの効果が現れるかもしれない。理解が得られなければならないが、ひきこもりがちな生徒が、高齢者との交流をオンラインで行い、行政に安否確認を報告するというようなシステムができあがれば、生徒にとって自己有用感、自己肯定感の向上につながり、不登校対策となる可能性が考えられる。

「次世代の学習ニーズを踏まえた指導」「多様性への対応に関する調査研究事業」について研究を行った3年間を振り返り、これからの通信制教育を含めた学校教育では、従来の「教科書を教える」ことから、地域人やいろいろなICT教材を用いて、「教科書以外でも教える」ことへの転換期になっているのではないだろうかと感じた。文部科学省は本校のような「普通科」高校を「普通科」「地域探究学科」「学際融合学科」に再編し、ただ大学などへの進学に向けた教育を変化させたい思いを持っていらっしゃるのだと思う。この研究を通して出会った人財やICT技術の向上という宝物を今後の本校教育に活かしたいと考える。

そして、いずれは、学び方の違いはあるが、全日制・定時制・通信制高校の垣根がなくなり、同じ方法で学べる方式が完成できるよう、今後も努力を続けていきたい。

最後に、このような調査研究の機会を与えて下さった文部科学省様に感謝の気持ちを添えながら、終わります。

以上

報告書作成者

岡山県美作高等学校通信制課程

教頭 前 克浩